

フィラデルフィア・アカデミーの創設 —— 一八世紀植民地都市における公共性の生成に関する一考察

鰐淵 秀一

Summary

This essay examines the formation of a public sphere in mid-eighteenth-century Philadelphia through the case study of the founding of the Academy of Philadelphia circa 1750. The Academy was founded as a voluntary association by a new generation of non-Quaker merchants and professionals who appeared in the city in the 1720s. Embracing the culture of commerce, they cultivated sociability through forming clubs and associations in urban space. Against the Quaker public sphere, which had dominated public discourse in colonial Pennsylvania since its inception, non-Quaker elites created their own public sphere by combining associational culture and print culture under the leadership of the printer Benjamin Franklin. Unlike the Quakers' vernacular public sphere that employed the language of civil Quakerism, which emphasized a legacy of toleration, diversity, and liberty, the newly emerged public sphere in the city used the language of commerce and empire, which was secular, polite and cosmopolitan in its nature. The educational ideal of the Academy shows the founders' vision of ideal public order in a prospered colonial city on the eve of the American Revolution. This *enlightened* public sphere was an urban and cosmopolitan phenomenon, and should be distinguished from *plebeian* public spheres in taverns and streets and *democratic* public spheres that Tocqueville observed in Antebellum America.

はじめに

1749年の夏、ジョージ王戦争の終結に伴い植民地防衛のための民兵団の活動に一区切りをつけ、すでに印刷業等の生業からも引退していたベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は、アカデミーと呼ばれるカレッジ入学前の青少年のための教育機関を創設するための計画に着手した。彼は『ペンシルヴァニアにおける青年の教育に関する提案』と題するパンフレットを準備し、その冒頭で以下のように書き記している。

[アカデミー設立の] 計画を練るための手掛かりを記した以下の文書は、私的にやり取りがなされた幾人かの公共精神に富むジェントルマンたちの了承を受け、その指示の下、印刷機で冊子を作製し、しかるべく配布し、こうした事柄に対する知識と理解、経験を有する諸子からの所感と助言を得ようとするものである。彼らは持てる影響力と最大限の努力を惜しまず、方策を定め、徐々に実行に移してきた。…¹⁾

¹⁾ Benjamin Franklin, *Proposals Relating to the Education of Youth in Pensilvania* (Philadelphia: [Franklin and Hall], 1749), 3.

ここには計画を実行するためにフランクリンが採用した「方策」(the scheme) がきわめて簡潔に述べられているが、これは彼自身が「公共のプロジェクト」のひとつと位置づけたアカデミーの創設を、植民地都市における公共性という文脈で考察する際にきわめて重要な視点を提供する。というのも、ここに示された方法や言葉遣いは、18世紀中葉に植民地に出現したそれまでとは異なるタイプの公共性を示していると考えられるためである。以下、研究史の整理とともに、本稿の課題を提示したい。

1990年代以来、英語圏の歴史家たちはユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) の提起した公共圏の概念をめぐる議論を重ねてきた。批判的理性を備えた私人たちによるコーヒーハウスやサロン、自発的結社における討論、出版メディアによる意見の開陳を通じて合理的・批判的討議が行われ、国家権力に対抗する世論を形成するという公共圏のブルジョワ・モデルは、実証的研究の進展のなかで批判に曝され、修正を被った。とりわけ、アメリカ史にそのモデルを適用する際には、公共圏の多元性、その内部における排除の問題、情念や政治的実践などの非理性的コミュニケーションの存在、国家や市民社会とのより複雑な関係などが議論され、ハーバーマスによる規範的概念とは裏腹に多様な実態が明らかにされている。²⁾ しかし、それは従来抽象的に論じられることの多かった公共性や市民文化 (civic culture) を、歴史的な実態に即して分析する視角を歴史家たちに提供したのである。

公共圏についての議論の深まりとともに、初期アメリカにおける公共性の生成と展開についても多くの研究が生み出された。その先鞭をつけたマイケル・ワーナー (Michael Warner) によれば、1720年代に新聞メディアの増加によって成立した印刷公共圏 (the print public sphere) は、各植民地で共和主義の言語を用いた匿名の「公衆」による旧来の権威主義的な政治文化の「構造転換」を促し、結果としてイギリス帝国の権威の転倒と合衆国の成立をもたらした。現在では、印刷文化に依拠するナショナルな規模の公共圏が革命期と初期共和国期を通じて全面開花し、新たな共和国の政治文化の基調となったことが多くの研究者によって指摘されている。³⁾ 一方で、街路や広場とともに酒場やサロン、自発的結社といった空間も公共性が発現する場として描かれる。このタイプの研究の多くは、

²⁾ ユルゲン・ハーバーマス、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』(未来社、1994年); クレイグ・キャルホーン編、山本啓・新田滋訳『ハーバーマスと公共圏』(未来社、1999年); John L. Brooke, “Reason and Passion in the Public Sphere: Habermas and the Cultural Historians,” *Journal of Interdisciplinary History* 29 (1998): 43-67; idem, “Consent, Civil Society, and the Public Sphere in the Age of Revolution and the Early American Republic” in *Beyond the Founders: New Approaches to the Political History of the Early American Republic*, ed. Jeffrey L. Pasley et al. (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004), 207-50.

³⁾ Michael Warner, *The Letters of the Republic: Publication and the Public Sphere in Eighteenth-Century America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990); David Waldstreicher, *In the Midst of Perpetual Fetes: The Making of American Nationalism, 1776-1820* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997); Jeffrey L. Pasley, “The Tyranny of Printers”: *Newspaper Politics in the Early American Republic* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2001). 初期アメリカにおける全国的規模の印刷公共圏の存在に疑義を呈する近年の研究として、以下を参照。Trish Loughran, *The Republic in Print: Print Culture in the Age of U.S. Nation Building, 1770-1870* (New York: Columbia University Press, 2007).

公共圏を社交やインフォーマルな政治が行われる空間と見なし、女性を含めた民衆や様々な社会集団が対話や競争を行い、社会的・政治的交渉が深められていく過程に関心を寄せている。⁴⁾ こうした研究を全体として俯瞰すれば、18世紀初頭に登場した印刷文化と社交・結社文化を両輪として、革命期・初期共和国期に一举に多元的かつ民主的な公共文化が花開き、選挙と政党によるハイポリティクスが機能する市民社会の基盤となった、というナラティブを見出すことができる。⁵⁾

しかし、こうしたナショナルかつホイッグ的ナラティブの採用は初期アメリカで展開した公共性の実態を見失わせることになりかねない。そこではトクヴィルがアンテベラム期のアメリカ東部社会に見出した民主的公共性の起源と発展に関心が寄せられ、植民地期に生じた多様な公共性のあり方が捨象されてしまう危険性がつきまとう。たとえば、「参加好きな国民」と呼ばれる民主的結社文化の前身として植民地期の自発的結社を理解する見方がこれに当てはまる。とりわけフランクリンの結社活動は、こうした視点から語られがちである。⁶⁾ こうしたナラティブに対して、植民地における公共性の生成と展開を、環大西洋的な広がりや文脈のなかに置き直し、かつ対象とする地域のローカルかつ偶発的な状況のなかで考察しなければ、その実態を明らかにすることは出来ないであろう。

とりわけ本稿が検討するフィラデルフィア、およびペンシルヴァニア植民地の場合、その地域的特性が植民地期を通じて公共性のあり方に大きな影響を及ぼしたことが指摘されている。植民地の最初の入植者であったクエーカー教徒は、度重なる内部分裂や他勢力の挑戦に曝されながらも、均衡政体や信仰の自由といった制度のみならず、印刷物や政治的儀礼を通じてクエーカーであること／クエーカーとして発言することが正統性を持ち、コ

⁴⁾ David S. Shields, *Civil Tongues & Polite Letters in British America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997); Steven C. Bullock, *Revolutionary Brotherhood: Freemasonry and the Transformation of the American Social Order, 1730-1840* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996); Simon P. Newman, *Parades and the Politics of the Street: Festive Culture in the Early American Republic* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1997); Mary P. Ryan, *Civic Wars: Democracy and Public Life in American City during the Nineteenth Century* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1998); Benjamin L. Carp, "Fire of Liberty: Firefighters, Urban Voluntary Culture, and the Revolutionary Movement," *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 58 (2001): 781-818 (以下 *WMQ* と略記); Albrecht Koschnik, "Let a Common Interest Bind Us Together": *Associations, Partisanship, and Culture in Philadelphia, 1775-1840* (Charlottesville: University of Virginia Press, 2007); Johann N. Neem, *Creating a Nation of Joiners: Democracy and Civil Society in Early National Massachusetts* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2008); John L. Brooke, *Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson from the Revolution to the Age of Jackson* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010); Jessica C. Roney, *Governed by a Spirit of Opposition: The Origins of American Political Practice in Colonial Philadelphia* (Baltimore: John Hopkins University Press, 2014).

⁵⁾ 金井光太郎は、マサチューセッツにおける社会構造の変動という視点から公共性の変容を論じ、同様のナラティブを描き出している。『アメリカにおける公共性・革命・国家——タウン・ミーティングと人民主権との間』(木鐸社、1995年)。

⁶⁾ 一部を挙げれば、Arthur Schlesinger Sr., "Biography of a Nation of Joiners," *American Historical Review* 50 (1944): 1-25; Lorraine S. Pangle, *The Political Philosophy of Benjamin Franklin* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2007), chapter 3.

コミュニティの共通善を規定するような公共文化を作り上げていた。⁷⁾ このクエーカー的公共性がペンシルヴァニアの政治文化において支配的であったことに加えて、街路や酒場といった公共空間ではより雑多で、階層やエスニシティ、宗派を横断した様々な人びとが討議に加わり、世論形成を通じて政治に参加していたという。⁸⁾ これらの研究は植民地期のフィラデルフィアにおける地域に根ざした多様な公共文化のあり方を明らかにしている。

以上の議論を踏まえて、本稿はフィラデルフィア・アカデミーの創設という事例の検討を通じて、18世紀中葉のフィラデルフィアにおいてクエーカー的公共性とも酒場における民衆の公共性とも異なる新たなタイプの公共性が出現したことを論じる。それはイギリス大西洋世界における商業ネットワークの発達とそれに伴う都市化のなかで生じた現象であり、帝国の首都ロンドンや本国の諸都市と深い関わりと持った新たな都市エリートによって担われていた。⁹⁾ 彼らは都市において旧来のクエーカーのエリートとは異なるネットワークを形成し、商業や帝国の言語を用いてクエーカー的公共性とは異なる公共性のヴィジョンを構想した。

1. フィラデルフィアの都市エリートと都市文化

(1) クエーカーの都市

フィラデルフィアは、1681年ペンシルヴァニア植民地の領主となったウィリアム・ペン(William Penn)によって植民地の首都として建設され、大西洋に注ぐデラウェア河と広大な後背地を流れるスクルキル川の近接する土地に位置する河口内港として、後背地の豊かな穀物生産を背景とする大西洋貿易によって成長した。1701年、ペンの特許状に基づいて都市自治体(city corporation)¹⁰⁾が設置されたが、その時点で都市人口は二千人程度に過ぎなかった。しかし、植民地建設以前から居住していたスウェーデン人やオランダ人に加えて、宗教的寛容を求めて移住したアイルランド人やスコットランド人、そしてドイツ系の敬虔派などの諸宗派の人々が共存し、当初から宗教的にも民族的にも多元的なコ

⁷⁾ John Smolenski, *Friends and Strangers: The Making of a Creole Culture in Colonial Pennsylvania* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2010); Alan Tully, *Forming American Politics: Ideals, Interests, and Institutions in Colonial New York and Pennsylvania* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1994), chapter 7.

⁸⁾ Peter Thompson, *Rum Punch & Revolution: Taverngoing & Public Life in Eighteenth Century Philadelphia* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999).

⁹⁾ こうした都市エリートを文化史の観点から扱った研究として、Carl Bridenbaugh and Jessica Bridenbaugh, *Rebels and Gentlemen: Philadelphia in the Age of Franklin* (New York: Oxford University Press, 1962 [1942]). 政治史的観点から扱った研究は、G. B. Warden, "The Proprietary Group in Pennsylvania, 1754-1764," *WMQ* 21 (1964): 367-89; Stephen Brobeck, "Revolutionary Change in Colonial Philadelphia: The Brief Life of the Proprietary Gentry," *WMQ* 33 (1973): 410-23.

¹⁰⁾ イングランド自治都市の自治体をモデルとして、市長(mayor)および市裁判官(recorder)、8名の市参事会員(aldermen)、12名の市会議員(common councilmen)によって構成された。市場の管理や埠頭の整備といった行政機能を期待されたが、独自の財源や法的権限を持たなかったため、統治機構としての役割は形骸化し、有力市民の名誉職となった。Judith M. Diamondstone, "Philadelphia's Municipal Corporation," *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 90 (1966): 183-201.

コミュニティであった。¹¹⁾

それにもかかわらず、初期の都市コミュニティのイニシアチヴを握っていたのはイングランド系クエーカー教徒であった。彼らは1700年時点で都市人口の四割を占め、単一の宗派としては最大のグループであった。とりわけ、クエーカーの貿易商はジャマイカやバルバドスとの西インド貿易に従事して利益を上げ、政府の役職や議員職を独占して影響力を発揮した。彼らは宗教的道德主義に基づいて植民地における演劇や賭博を禁止するなど都市生活にも一定の影響を及ぼし、初期のフィラデルフィアの敬虔な雰囲気醸成するのに貢献した。¹²⁾

しかし、クエーカーが独占した植民地政治は植民地期を通じて常に不安定であった。早くも1684年には、領主ペンの土地政策に対する入植者たちの不満を背景に植民地議会に反領主陣営が形成され、議会と領主との間に政治的対立が生じた。¹³⁾ 1701年、ペンは議会との妥協の末に『特権憲章』(the Charter of Privileges)を定めたが、そこでは植民地議会の立法には領主あるいは総督による許可が必要とされた。¹⁴⁾ そのため、議案の立法をめぐる議会と領主との間には常に緊張と対立が生じ、植民地政治はしばしば機能停止に陥った。こうした政府の非効率性は市民たちによる自発的結社の結成を促す一因となった。

また、クエーカーがもたらした植民地政治の初期条件は、アカデミー創設の前提となった。すなわち、他の植民地と異なり、ペンシルヴァニアは植民地政府と結びついた公定教会を持たなかったため、特定の宗派を後援団体とする「政府=教会立カレッジ¹⁵⁾」を持たなかった。クエーカーはその教義によって専門の訓練を必要とする聖職者を否定したため、ペンシルヴァニアには聖職者養成機関としてのカレッジが必要とされなかったのである。¹⁶⁾ その結果、ペンシルヴァニアには、アカデミーが創設されるまで高等教育機関は存在しなかった。

(2) 新たな都市エリートの登場

フィラデルフィアにおいてクエーカーの一元的支配に変化が訪れたのは、1720年代であった。アン女王戦争が引き起こした長期に渡る西インド経済の停滞の影響に加えて、1720年の南海泡沫事件は決定的な打撃を与え、指導的なクエーカー商人の多くが力を失った。¹⁷⁾ この不況で彼らが事業に失敗して姿を消すか、土地投機に転じてジェントリへと転身する一方で、ブリテン諸島から移住してきたイングランド国教会(以下、国教会)や長

¹¹⁾ Mary Maples Dunn and Richard S. Dunn, "The Founding, 1681-1701," in *Philadelphia: A 300-year History*, ed. Russell F. Weigley (New York: W.W. Norton, 1982), 28.

¹²⁾ *Ibid.*, 18-22, 28-9.

¹³⁾ Gary B. Nash, "City Planning and Political Tension in the Seventeenth Century: The Case of Philadelphia," *Proceedings of the American Philosophical Society* 112 (1968): 68-73.

¹⁴⁾ *Minutes of the Provincial Council of Pennsylvania*, 2: 54-8.

¹⁵⁾ F・ルドルフ、阿部美哉・阿部温子訳『アメリカ大学史』(玉川大学出版部、2003年)、37頁。

¹⁶⁾ Frederick B. Tolles, *Meeting House and Counting House: the Quaker Merchants of Colonial Philadelphia, 1682-1763* (New York: W.W. Norton, 1962 [1948]), 148-49.

¹⁷⁾ Gary B. Nash, *The Urban Crucible: Social Change, Political Consciousness, and the Origins of the American Revolution* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1979), 72-75, 119.

老派の新たな世代の貿易商が現れた。それ以降、非クエーカーの商人は都市の貿易商の半数以上を占め、西インド貿易よりもロンドンやブリストルなどのブリテン諸島や他の大西洋岸諸地域へと経済活動を拡大し、不況から脱した都市の経済成長の中心となった。その結果、経済規模は続く十年で二・五倍に増加し、フィラデルフィアは安定した成長期を迎える。¹⁸⁾

こうした経済構造の変化とともに、都市では新興のエリート層が影響力を高めつつあった。非クエーカーの貿易商の増加とともに、1690年代の「キース論争¹⁹⁾」(the Keithian controversy)以降、植民地生まれのクエーカーのなかに国教会に改宗する者が多く現れた。この傾向は18世紀以降も続き、アカデミーの理事となるロバート・ストレット(Robert Strettell)やボンド兄弟(Thomas and Phineas Bond)もこうした改宗者であった。こうしたエリート層の変化は都市自治体のメンバーに反映され、当初は多数を占めていたクエーカーは次第に減少し、1750年頃までには国教会や長老派の貿易商、法律家、医師などの有力市民にその座を譲り渡していた。²⁰⁾ 次節で見ると、アカデミーの理事会のメンバーを構成したのはこうした新興の都市エリートたちであった。

しかし、都市における影響力の低下にもかかわらず、植民地議会は依然としてクエーカーに占められていた。有力なクエーカーの多くは、貿易を営むと同時に後背地の広大な土地を所有するジェントリでもあった。彼らは入植する移民たちとパートナーシップな関係を結び、名望家として議会に選出され、フィラデルフィア市周辺を除くほぼ全ての議席を独占した。²¹⁾ この結果、後背地に政治的基盤を置くクエーカー議会は、植民地における戦争への関与や領土の所有地への課税権といった問題をめぐって、しばしば領主およびその支持者と対立した。1744年、ジョージ王戦争の開戦に際して両派の対立が激化していたフィラデルフィアを訪れたメリーランドの医師アレグザンダー・ハミルトン(Alexander Hamilton)は、「[植民地]政府は議会の二つの勢力の絶え間ない衝突によって無秩序な(もしくは統治が不在の)状態にある」と記している。²²⁾

(3) 都市文化の変容

1720年代以降、フィラデルフィアは大きな社会変化を経験した。1720年代には五千人に満たなかった都市人口は1750年には一万四千人に達した。これはボストンに次いで、ニューヨークに匹敵する規模であった。民族的・宗教的にも都市は多様性を増していった。ある

¹⁸⁾ Idem, "The Early Merchants of Philadelphia: the Formation and Disintegration of a Founding Elite," in *The World of William Penn*, eds. Richard S. Dunn and Mary Maples Dunn (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1986), 342-46.

¹⁹⁾ スコットランド系クエーカーのジョージ・キース(George Keith)による「内なる光」等のクエーカーの教義に対する批判に端を発する論争。植民地議会を巻き込む政治問題に発展し、1702年キース側が敗れ、キースを含む支持者たちは国教会に転向した。

²⁰⁾ Diamondstone, "Philadelphia's Municipal Corporation," 197-98.

²¹⁾ Alan Tully, *William Penn's Legacy: Politics and Social Structure in Provincial Pennsylvania, 1726-1755* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1977), 82-86.

²²⁾ Carl Bridenbaugh, ed., *Gentleman's Progress: The Itinerary of Dr. Alexander Hamilton, 1744* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1948), 29.

ドイツ系移民の観察によれば、当時のフィラデルフィアでは「世界中、とりわけヨーロッパのあらゆる土地からやってきた人々に会うことができ、その数は1万人を上回る²³⁾」。

こうした変化とともに、世紀半ばにはクエーカーは都市人口の四分の一程度に落ち込んだ。その結果、フィラデルフィアは次第に「クエーカーの都市」の雰囲気を失いつつあった。また、クエーカーの間でも、第二世代以降はその特徴である節制や質朴を捨てる者が増加し、「クエーカー大公」(Quaker Grandees) と呼ばれたペンバートン家 (the Pembertons) やノリス家 (the Norris) のように豪華な邸宅を建て、贅沢な生活をする者も現れた。²⁴⁾

このようなクエーカーのライフスタイルの変化は、必ずしも信仰心の衰退や倫理的墮落を意味するものではなく、貿易経済の成長にともなう本国からの大量の消費財の流入による、植民地社会への消費文化の浸透の結果であった。1752年に植民地議会に提出された紙幣発行に関する報告書によれば、

われわれ[ペンシルヴェニア]の本国製品の消費は年々増加していることが先の記録からわかる。1723年にはロンドンからの船舶は二隻のみだったが、1748年8月18日から1752年の同日まで、船舶数は三七を数え、年平均九隻が製品を積荷いっぱいにして到着する。ここにはイギリスの他港の船数は含まれていない。²⁵⁾

本国製品の消費は植民地社会のあらゆる階層に普及し、ファッションや食器などを通じたイギリス式の生活様式が都市生活の色調を覆うようになった。²⁶⁾

消費財を通じた本国文化の流入と機を一にして、都市ではコーヒーハウスやクラブのような社交文化が流行するようになった。フィラデルフィア最古のクラブである古来のブリトン人協会 (the Society for Ancient Britons) (1729年) や貿易商の商談や情報収集の場として名高いロンドン・コーヒー・ハウス (the London Coffee House) (1734年) が現れるとともに、舞踏会も1720年代後半から定期的開催され、華やかな男女の社交場として人気を集めた。²⁷⁾ こうした都市の社交文化は、消費文化の浸透とともに植民地社会の「イングランド化²⁸⁾」(anglicization) を推進することになった。

こうした社交文化の浸透のなかでフィラデルフィアの市民たちが熱心に組織し、参加したのが自発的結社であった。1720年代から親方大工組合 (the Carpenters Company) やフランクリンが主催する会員相互の改善を目的としたジャントー (the Junto) をはじめとする、

²³⁾ Gottlieb Mittelberger, *Journey to Pennsylvania*, trans. and eds. Oscar Handlin and John Clive (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1960), 41.

²⁴⁾ Tolles, *Meeting House*, chapter 6.

²⁵⁾ *Votes and Proceedings of the House of Representatives of the Province of Pennsylvania*, *Pennsylvania Archives*, 8th ser. (Philadelphia: State Printer, 1852), 4: 3518.

²⁶⁾ T. H. Breen, "An Empire of Goods: The Anglicization of Colonial America, 1690-1776," *The Journal of British Studies* 84 (1986): 467-99; Breen, *The Marketplace of Revolution: How Consumer Politics Shaped American Independence* (New York: Oxford University Press, 2004).

²⁷⁾ Edwin B. Bronner, "Village into Town, 1701-1746," in *Philadelphia*, 54-57.

²⁸⁾ 社交文化については、Shields, *Civil Tongues*; イングランド化に関しては、註28に挙げたBreenを参照のこと。

本国のそれをモデルにした様々な結社が出現した。²⁹⁾ フリーメイソンの存在に示されるように、自発的結社の増加は、この時期のフィラデルフィアがイギリスや他のヨーロッパ諸都市とのコスモポリタンなネットワークに組み込まれていたことを意味している。³⁰⁾ フィラデルフィア・アカデミーもこうした自発的結社のひとつとして創設されたのである。

2. 理事会と結社のネットワーク

(1) 理事会の構成

アカデミー創設の計画に着手したフランクリンは、パンフレットを発行するだけでなく、それとほぼ同時期である1749年8月24日付の『ペンシルヴァニア・ガゼット』紙上にアカデミー創設の必要を訴える文章を寄せ、寄付を募った。³¹⁾ 同年11月13日、五年分納の寄付を行う者たちにより二十四名の理事が選出され、『規約』が定められた。³²⁾ 理事の中から一年に一度の選挙によって理事長と会計が選ばれることが定められた。³³⁾ 1753年に理事会は領主トマス・ペン (Thomas Penn, 1702-1775) とリチャード・ペン (Richard Penn Sr., 1706-1771) により特許状を付与され、法人格を得た。³⁴⁾ 本節では、この理事会の構成とネットワークの分析を通じて、自発的結社を媒介とした都市エリートの公共性の来歴を考察する。³⁵⁾

「フィラデルフィア市の公共アカデミー」(the Public Academy in the City of Philadelphia) という名称が示すように、アカデミーの理事会は特定の宗派や教会ではなく都市と深く結びついた組織であった。『規約』によれば、アカデミーの理事はフィラデルフィア市および近隣の住人であることが条件とされており、市内で月に一回開催される総会 (general convention) に出席することが義務付けられていた。³⁶⁾ 理事が市外の遠隔地や海外へと移住する場合は、死亡した場合と同様、理事職を解かれ、新しい理事が市内および近郊から選出されることが明記された。³⁷⁾ 実際に、初代の理事はジェームズ・ローガン (James

²⁹⁾ Roney, *Governed by a Spirit of Opposition*, 71-2.

³⁰⁾ Peter Clark, *British Clubs and Societies, 1580-1800: The Origins of an Associational World* (Oxford: Oxford University Press, 2000); シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン、山本秀行訳『市民結社と民主主義 1750-1914』(岩波書店、2009年)。

³¹⁾ On the Need of the Academy, *Pennsylvania Gazette*, August 24, 1749.

³²⁾ UPA 1.1, Trustees of the University of Pennsylvania Minute Books, vol. 1, November 13, 1749, University of Pennsylvania Archive. (以下UPAと略記)

³³⁾ UPA 3, 1115, Constitutions of the Publick Academy, in the City of Philadelphia, 1749, UPA.

³⁴⁾ Charter of the Academy of Philadelphia, July 13, 1753, *PBF*, 5: 7-10.

³⁵⁾ 理事会を含む制度史的研究は以下を参照。George B. Wood and Frederick D. Stone, *Early History of the University of Pennsylvania: From its Origin to the Year 1827* (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1896); Thomas H. Montgomery, *A History of the University of Pennsylvania from its Foundation to A.D. 1770: Including Biographical Sketches of the Trustees, Faculty, the first Alumni and Others* (Philadelphia: George W. Jacobs, 1900); Edward P. Cheyney, *History of the University of Pennsylvania, 1740-1940* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1940).

³⁶⁾ UPA 3, 1115, Constitutions of the Publick Academy, in the City of Philadelphia, 1749, UPA.

³⁷⁾ Ibid.

Logan)を除く全員がフィラデルフィア市に居住する都市民であった。

理事会を構成する理事たちは、フィラデルフィアの都市エリートであった。彼らの職業構成を見ると、半数以上を占める貿易商および医師や法律家などの専門職がその中核をなし、加えて彼らと関係の深い印刷業者や銀細工師といった商工業者から構成されていた。³⁸⁾(表1)これは当時の商業都市における典型的な都市エリートであり、フィラデルフィアの社会構造を反映していると思なすことができる。すなわち、アカデミー創設を主導したのは地主やジェントリではなく、「実業家」(men of business)であった。初代理事の大半は前節で見た1720年代以降に台頭した新興の都市エリートであり、彼らの三分の二はイングランドやアイルランド、他の植民地の出身で、1714年以降に移住した人々であった。³⁹⁾

表1 1750年のアカデミーの理事と結社、都市自治体への参加

	職業、身分	宗派	ジャントー	図書館	消防組合	都市自治体
Logan, James	ジェントリ	クエーカー				
Lawrence, Thomas	貿易商	国教会			●	● (市長)
Allen, William	法律家、貿易商	長老派		●		● (市裁判官)
Inglis, John	貿易商	長老派				● (議員)
Francis, Tench	法律家、貿易商	国教会		●		● (議員)
Masters, William	貿易商	国教会				
Zachary, Lloyd	医師	クエーカー			●	
M'Call, Jr., Samuel	貿易商	長老派		●		● (議員)
Turner, Joseph	貿易商	国教会			●	● (参事)
Franklin, Benjamin	印刷業者	理神論	●	●	●	● (議員)
Leech, Thomas	貿易商	国教会				
Shippen, William	医師	長老派				● (議員)
Strettell, Robert	貿易商	国教会				● (参事)
Syng, Philip	銀細工師	国教会	●	●	●	
Willing, Charles	貿易商	国教会			●	
Bond, Phineas	医師	国教会		●		
Peters, Richard	聖職者	国教会		●		
Taylor, Abraham	貿易商	国教会				
Bond, Thomas	医師	国教会	●	●		● (議員)
Hopkinson, Thomas	法律家、貿易商	国教会	●	●		● (議員)
Plumsted, William	貿易商	国教会		●	●	● (参事)
Maddox, Joshua	貿易商	国教会				
White, Thomas	貿易商	国教会				
Coleman, William	貿易商	国教会	●	●		● (議員)

出典：Montgomery, *A History of the University*, 53-108; Whitefield J. Bell, Jr., *Patriot-Improvers: Biographical Sketches of Members of the American Philosophical Society*, vol. 1 (Philadelphia: American Philosophical Society, 1997); Library Company: Acceptance of the Charter, May 3, 1742, *PBF*, 2: 346-47; Articles of the Union Fire Company, December 7, 1736, *ibid.*, 2: 153-54.

³⁸⁾ モンゴメリによる初代理事二十四名のプロソボグラフィを利用した。Montgomery, *A History of the University*, 53-108.

³⁹⁾ Montgomery, *A History of the University*, 53-108.

また、理事たちの宗派について、フランクリンが「理事の四分之三はイングランド国教会の信徒で、残りは穏健な信仰 (moderate principles) を持った人々です」と述べているように、理事の多数は国教徒によって構成されていた。⁴⁰⁾ しかし、表1が示すように、宗派による内訳は国教会十七名、長老派四名、クエーカー二名で、比重の偏りは見られるもののいずれの宗派も排除することなく選出されていた。この無宗派の理事会構成は他の植民地のカレッジには見られないもので、先行研究においてもフィラデルフィア・アカデミーの際立った特徴の一つとされてきた。⁴¹⁾

アカデミーの理事たちは1740年代までに都市における影響力を高め、理事会の結成時には、都市自治体のメンバーや植民地政府の要職を多数占めていた。すなわち、初代理事の二十四名には、都市自治体の現職の市長、市裁判官、市参事会員八名中三名、市会議員十五名中八名が含まれていた。(表1) また、現職の植民地議会議員は二名に過ぎなかったが、理事の多くは首席裁判官 (chief justice) や最高法務官 (attorney general)、植民地参事会員 (councilmen)、治安判事 (justice of the peace) などを務めていた。

この背景には、新興の非クエーカーのエリート勢力の伸長とともに、植民地議会を独占するクエーカー派に対抗して影響力の拡大を目論む領主による、政府の要職への登用を通じた彼らの取り込みがあった。彼らは1720年代頃からコーヒーハウスやクラブ、フリーメイソンといった場での日常的な社交や、都市自治体、ビジネス上のパートナーシップ、婚姻関係を通じてネットワークを形成していた。しだいに都市においてプレゼンスを高めていく国教会や長老派のエリートたちに目をつけ、1740年代以降ペンは私設秘書や治安判事といった政府の役職への任用を通じて彼らを味方にした。その結果、1760年代までに議会に対抗し領主の側に立つゆるやかな党派が形作られた。⁴²⁾ ただし、タリーが指摘するように、領主派は政治的というよりも社会的なネットワークであり、フレンチ・インディアン戦争の勃発までは、戦時を除いて領主派と議会派の間での対立が表面化することはなかった。⁴³⁾

(2) 印刷業者フランクリンと結社のネットワーク

理事会のメンバー構成の偏向にもかかわらず、アカデミーの創設者たちは党派=宗派対立に対して中立を標榜していた。彼らによれば、「[理事の] 多くは教育を受けるべき子弟を持たないが、公共善の観点から、宗派 (sect) や党派 (party) を考慮することなく行動して」おり、⁴⁴⁾ 理事会の会合においても、学生を受け入れる際に宗派や党派に関わりなく選考することが確認されている。⁴⁵⁾ 無宗派の理事会の構成はアカデミーの特徴であったが、これは理事会がいずれの宗派をも媒体としない、都市的公共性を基盤とした組織であったこと

⁴⁰⁾ Franklin to Samuel Johnson, August 9, 1750, *PBF*, 4: 38.

⁴¹⁾ R・ホフスタッター、井門富二夫・藤田文子訳『学問の自由の歴史1——カレッジの時代』(東京大学出版会、1980年)、163-65頁。

⁴²⁾ Brobeck, “Revolutionary Change,” 410-23.

⁴³⁾ Tully, *William Penn's Legacy*, 81.

⁴⁴⁾ Paper on the Academy, July 31, 1750, Leonard W. Labaree et al., eds. *The Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale University Press, 1959-), 4: 35.(以下、*PBF*と略記)

⁴⁵⁾ UPA 1.1, Trustees of the University of Pennsylvania Minute Books, v.1, February 2, 1750, UPA.

から説明できる。そして、その都市的公共性は、フランクリンに代表されるフィラデルフィアの印刷文化と結社文化に由来するものであった。

1723年にボストンからフィラデルフィアに移住した印刷業者であったフランクリンは、独立後、次々と事業を展開した。彼は「印刷業者」を名乗りつつ、実際はフィラデルフィアのみならずサウスカロライナやニューヨークの印刷所や製紙工場の経営、書籍業、銀行業、土地投機業などのビジネスを手掛けた実業家であった。その一方で、植民地議会の書記兼公認の印刷業者(1735年)、郵便局長(1737年)、治安判事、市議員、植民地参事会員などの役職を歴任し、1748年にビジネスから引退した後、1751年には植民地議会の代議員に選出された。アカデミー創設の計画時には、彼はフィラデルフィアの最も著名な名望家の一人であった。⁴⁶⁾

印刷業者としての社会的役割は、都市コミュニティにおける社交の結節点にフランクリンを置いた。すなわち、フィラデルフィアの市民の大多数は彼が発行する『ペンシルヴァニア・ガゼット』の購読者であり、書店と郵便局を兼ねた彼の印刷所は、コーヒーハウスやクラブとともに都市の社交の場であった。18世紀の都市において、印刷業者は聖職者や法律家、医師といった人々と同じく、社会的ネットワークの中心にあって様々な公的活動に積極的に関与した。⁴⁷⁾

結社活動においても、彼の印刷業者としての役割は重要であった。彼は自らが発行する『ガゼット』紙やパンフレットを利用して、結社の必要性や有用性を訴える論説を公表し、財源として寄付や富くじへの参加を募り、市民の間に世論を喚起した。⁴⁸⁾ フランクリンは印刷物を通じてフィラデルフィアにおける結社活動のスポークスマンとして振る舞ったのである。フランクリンという個人を通じて、フィラデルフィアの印刷文化と結社文化は不可分の関係にあった。

そして、アカデミーの理事会は、フィラデルフィアの市民たちによる結社活動との連続性の上に成立していた。すなわち、表1からは理事会のメンバーがジャントーのメンバーを中核として、会員制図書館(the Library Company of Philadelphia)やユニオン消防組合(the Union Fire Company)の会員と重複していることが読み取れる。理事二十四名中、フランクリンを含む五名がジャントーのメンバーで、彼らを含む十一名が会員制図書館の会員であった。そして、ユニオン消防組合に所属していた七名は会員制図書館とは異なる人脈の存在を示している。いずれにも属していない理事たちは都市自治体のメンバーとしてコネクションを有しており、それ以外にもビジネスや宗派、個人的な交流関係が存在した。

このことは、理事会の構成が都市における宗派=党派対立に規定されつつも、そうした対立を乗り越えて「公共のプロジェクト」を実現させようとする意志を持った試みであったことを意味している。事実、1751年に理事のジェームズ・ローガンが亡くなった際、後任としてクエーカー派の領袖であったアイザック・ノリス二世(Isaac Norris Jr.)が新理

⁴⁶⁾ Gordon S. Wood, *The Americanization of Benjamin Franklin* (New York: Penguin, 2004), chapter 1.

⁴⁷⁾ ジョナサン・バリー「ブルジョワ集団主義?」、ジョナサン・バリー、クリストファー・ブルックス編、山本正訳『イギリスのミドリング・ソート——中流層をとらえてみた近世社会』(昭和堂、1998年)、131頁。

⁴⁸⁾ Leonard W. Labaree and et al., eds., *The Autobiography of Benjamin Franklin*, 2nd ed. (New Haven: Yale University Press, 2003), 199-200.

事に選出されたことは、創設時のアカデミーの無党派主義を象徴的に示している。⁴⁹⁾ これは、クエーカー教徒であることが基盤となっていたクエーカーの公共性の持つ宗派性とは一線を画すものであり、18世紀に出現した都市的公共性の性格を示していると言えよう。

3. 教育理念と公共性のヴィジョン

(1) 都市エリートの育成

フランクリンによる『ペンシルヴァニアにおける青年の教育に関する提案』(以下『提案』と略記)は、ジョン・ミルトン(John Milton)やジョン・ロック(John Locke)などの教育論からの引用による注釈が大半を占めつつも、彼独自の教育理念が展開されている。⁵⁰⁾ また、1751年7月にリチャード・ピーターズ師(Rev. Richard Peters)の『教育に関する説教』(以下『説教』)を出版する際、フランクリンは『英語学校案』を付して、アカデミー内の英語学校の位置づけを明らかにするとともに、そこでのカリキュラムを提示している。⁵¹⁾ 本節では主にそれらのパンフレットに書かれた言説の分析を通じて、アカデミーの教育理念とそこに現れた公共観を明らかにする。

教育史の文脈において、フィラデルフィア・アカデミーの教育理念は、古典・人文主義教育が中心であったそれまでのカリキュラムに対して啓蒙的教育観に基づく実学的カリキュラムを打ち出した転換点として見なされてきた。⁵²⁾ ゴードンはこうした啓蒙的=合理的・実学的な教育理念の導入という進歩主義的な見方を批判し、当時のフィラデルフィアを商業社会として性格づけた上で、その教育思想の自由主義的・個人主義的な性格(“pursuit of self-interest”)を強調した。⁵³⁾ しかし、公共性という観点から見直す場合、アカデミーの教育理念は啓蒙的合理主義でも所有的個人主義でもない、商業社会における公共精神を持った都市エリートの育成が目指されていたことが明らかになるだろう。

『提案』のなかでフランクリンは、

青年に対するすぐれた教育というものは、公私を問わず、家族および国家(commonwealth)にとって幸福の最も確実な基礎であると、あらゆる時代の賢人は見なしてきた。それゆえ、ほとんどあらゆる政府は、自分たちおよび邦に敬意をもって公共に奉仕す

⁴⁹⁾ UPA 1.1, Trustees of the University of Pennsylvania Minute Books, v.1, November 12, 1750, UPA.

⁵⁰⁾ Franklin, *Proposals*, 5.

⁵¹⁾ Richard Peters, *A Sermon on Education. Wherein Some Account is Given of the Academy, Established in the City of Philadelphia. Preached at the Opening Thereof, on the Seventh Day of January 1750-1* (Philadelphia: [Franklin and Hall], 1751); *Idea of the English School, 1751, PBF*, 4: 101-8.

⁵²⁾ Lawrence A. Cremin, *American Education: The Colonial Experience, 1607-1783* (New York: Harper and Row, 1970), 375-8; Loraine S. Pangle and Thomas L. Pangle, *Learning of Liberty: The Educational Ideas of the American Founders* (Lawrence: University Press of Kansas, 1993), 75-90; R・F・パッツ、L・A・クレメン、渡部晶ほか訳『アメリカ教育文化史』(学芸図書、1977年[1953])、85-90頁; 片山文雄「有用さの教育——ベンジャミン・フランクリンのアカデミー設立提案」『東北工業大学紀要』第27号(2007年)、9-18頁。

⁵³⁾ Ann D. Gordon, *The College of Philadelphia, 1749-1779: Impact of an Institution* (New York: Garland, 1989), esp. chapter 3.

る人間を次代に残すために学問のための学校を設立し、相応の財源を与えてきた⁵⁴⁾

と述べて、高等教育の目的が、国家や邦（植民地）といった公共に奉仕し得る「有用な」人材の育成にあることを明確にしている。

アカデミーが計画された時期のフィラデルフィアは、商業都市としての成長のただ中であつた。市民の大半は、ヒエラルキーの頂点に立つ貿易商や人口の半数を占める小売商や職人などの商工業者であつた。フィラデルフィアに限らず、こうした商業社会において教育は職業訓練の手段として必要とされ、人文主義教育よりも実用主義教育が求められた。⁵⁵⁾ 貿易商が半数以上を占め、専門職や職人などの「実業家」によって構成された理事会は、その価値観を反映していた。アカデミーの構想が彼らの討議の中で形作られ、教育の目的が有用な人材の再生産であつたならば、それは商業社会における人材供給というニーズに答えようとするものだったはずである。

実際に、アカデミーの教育はそのようなニーズに応えようとするものだった。『英語学校案』によれば、アカデミーで学ぶことによって、若者は「いかなる仕事や職業にも対応し」、「市民生活における様々な職務を経験し、それを果たすのに相応しい者となり、自分たち自身および邦に利益と評判をもたらすだろう」とされた。⁵⁶⁾ また、算術や会計、英語や職業上必要な外国語といった科目は「最も有用かつ最も装飾的な」(most useful and most ornamental) なものであり、すべてビジネスや職務の遂行、社交生活に必要な能力であつた。例えば、博物学や農学は「彼らが商人、職人、聖職者のいずれであろうとも非常に役に立つ」し、「商業の歴史、つまり技術の発明、製造業の勃興、貿易の発展、その中心地の変遷およびその理由、原因に関する歴史」は「すべてのものにとって有益であろう」とされている。⁵⁷⁾

また、アカデミーではラテン語教育さえも有用さという見地からその意義が捉えられていた。ピーターズ師によれば、

わたしはこのことを、ラテン語学校が貶められているとは考えていない。否、全く逆で、英語の大部分がいかにラテン語に由来するものであることか。知的職業における技術と科学の用語はすべてギリシャ語とラテン語から取られているし、他のどんな言語からも得られない有用な知識が豊富に見出せるのである。こうした職業の資格を得るために学ぶ者および読書によって全般的な教育と知識を求める者にとって、ラテン語とギリシャ語を通じて知識を得ることは絶対の義務である。⁵⁸⁾

フランクリンも同様に、全員が古典語を学ぶ必要はないが、神学、医学、法学を志す者にとっては不可欠であるとしている。⁵⁹⁾

⁵⁴⁾ Franklin, *Proposals*, 5.

⁵⁵⁾ フランスの事例について、深沢克己『海港と文明』(山川出版社、2002年)、223頁。

⁵⁶⁾ *Idea of the English School, PBF*, 4: 108.

⁵⁷⁾ Franklin, *Proposals*, 27-28.

⁵⁸⁾ Peters, *Sermon on Education*, 25.

⁵⁹⁾ Franklin, *Proposals*, 25.

商業的な実学主義に加えて、アカデミーは、生徒が礼節 (politeness) あるいは上品さ (gentility) を身につけることを目的としていた。『提案』では、ミルトンやロックの著作を引用しながら、作法の重要性を説き、母国語や外国語の正しい発音や書き方から文体に至るまでを指導し、身体の健康のためにランニングや跳躍、レスリング、水泳などの運動をさせることを重視している。⁶⁰⁾ また、精神面での指導に関しても、

あらゆることについて、絶えず心の優しさ (benignity of mind) を説き聞かせ、陶冶すべきである。それはあらゆる機会を探し捉えては、相手に奉仕し、尽くすことであり、いわゆる育ちのよさ (good breeding) の基礎となる。それは身につけた者に非常に有益で、あらゆる人に好ましいものである⁶¹⁾

と述べて、他人と上手く付き合うためのよき人格と感性の陶冶を教育の目的のひとつに挙げている。このような礼節や社交への志向は18世紀のブリテン世界に広く共有されていたが、アカデミーの教育理念もこうした商業社会の価値規範を反映していた。⁶²⁾

こうした礼節や上品さへの志向は、アカデミーの立地に関する議論からも見ることができる。理事会ではアカデミーが都市と田舎のどちらに置かれるべきか、どちらが生徒にとってよりよい環境であるかが話し合われたが、結局大多数の理事が都市を推したため、港や市庁舎など都市の中心部に近い四番通りにある土地と建物を購入して校舎としたのである。都市には墮落の誘惑がつきまとう一方で、生徒たちは「ジェントルマンたちとの会話によって、振る舞いや物腰のよさ」を得られるのであった。⁶³⁾ ここには、文明や洗練は都市において顕現するという当時の通念の反映を見ることができる。⁶⁴⁾ アカデミーと都市との結びつきは、空間的にも志向されていた。

こうした「礼節ある学識豊かな教育⁶⁵⁾」(polite and learned education) を通じて、アカデミーでは本国のジェントルマンにも劣らない洗練された都市エリートの育成が目指された。その都市エリート像はフィラデルフィアという商業都市にふさわしい商業の言語で描かれ、有用な知識や礼節という商業社会の価値規範で公共性を語ることができたのである。

(2) 統治エリートの養成

創設者たちがアカデミーに求めたものは単なる洗練された実業家の養成ではなかった。

⁶⁰⁾ Ibid., 9-19.

⁶¹⁾ Ibid., 29.

⁶²⁾ 北米植民地における礼節と社交の規範に関しては、以下を参照。Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Vintage, 1992); Shields, *Civil Tongues*; 拙稿「商業社会の倫理と社会関係資本主義の精神——『フランクリン自伝』における礼節と社交」『アメリカ研究』第45号(2011年)、157-76頁。

⁶³⁾ Cadwallader Colden to Franklin, November, 1749, *PBF*, 3:430-2; Franklin to Cadwallader Colden, February 13, 1750, *ibid.*, 3: 461-63.

⁶⁴⁾ Peter Borsary, *The English Urban Renaissance: Culture and Society in the Provincial Town, 1660-1770* (Oxford: Oxford University Press, 1989), 261.

⁶⁵⁾ On the Need of the Academy, *Pennsylvania Gazette*, August 24, 1749.

それはまた、教育を通じて植民地の指導者を養成するという側面があったことが指摘できる。『提案』は歴史教育を重視しているが、そこでは歴史を通じて統治者に必要とされる知識や公共的徳、そして統治の技術といった能力を磨くことが主眼とされている。例えば、歴史は「あらゆる種類の徳、公共精神、胆力などの美と有用性」を若者に教えるとともに、「大勢の人々の集合、すなわち軍隊、都市、諸民族 (nations) を統治し、動員、指導する際に弁論術がいかにすばらしい効果を持つかを教える。」また、歴史は「公共にとって有益である」「公共宗教」(a public religion)、そしてその最もすぐれたものとしての「キリスト教」(the Christian religion) の必要性を示すものでもあった。⁶⁶⁾ さらに、

歴史の教育を通じて示されるのは、世俗の団体および政体 (civil orders and constitutions) の利点である。すなわち、結社に参加し政府を設立することによっていかに人々とその財産が守られるかということ、産業が促進され利益をもたらし、技術が発明されることで生活がよりよいものとなること、そして自由の利点、放縦の害、よき法と司法の正しい遂行から生じる利益などである。その結果、健全な政治の第一原理が青年の精神に定着する⁶⁷⁾

と述べている。ピーターズ師も、教育を通じて「自然、国家、世俗、都市の法の体系を学び、その影響が及ぶ範囲で正義と権利が守られ、治められるのである」としている。⁶⁸⁾ ここに見られるのは、法や制度に則って、邦を統治し、社会秩序を保つことができるような指導者のあり方である。

こうした指導者像には18世紀以降に植民地においても見られた「イギリス人意識」、すなわちイギリス帝国の一員としての意識が反映されていた。⁶⁹⁾ 『提案』では、「地図の勉強をしながら大戦闘のあった場所を指摘し、昔と現在の地名および関係国の境界、位置、領域などを言える必要がある」として、地理学が挙げられている。⁷⁰⁾ 絶えざる戦争の脅威のなかで、植民地の指導者はイギリス帝国における植民地の位置や利害関係を把握する必要があったのである。また、

最良の現代史、とくにわれわれの母国の歴史を学ぶべきである。それからわれわれの植民地の歴史をやる。それとともに、植民地の興隆、拡張、グレート・ブリテンへもたらす利益、植民地が繁栄し、自由を確保するための手段などを学ぶ⁷¹⁾

と述べられているように、歴史教育を通じてイギリス帝国の一員としてのアイデンティティを育むことが目指された。彼らは植民地の繁栄がイングランド本国との帝國的な結びつき

⁶⁶⁾ Franklin, *Proposals*, 22.

⁶⁷⁾ *Ibid.*, 22.

⁶⁸⁾ Peters, *Sermon on Education*, 12.

⁶⁹⁾ Ned C. Landsman, *From Colonials to Provincials: American Thought and Culture* (Ithaca: Cornell University Press, 2000); リンダ・コリー、川北稔監訳『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版会、2000年)。

⁷⁰⁾ Franklin, *Proposals*, 20.

⁷¹⁾ *Ibid.*, 25.

によって支えられていたことに自覚的であった。

そして、このイギリス人意識は裏返せば容易に排外的ナショナリズムに転じるものであった。1750年7月に理事会が都市自治体から資金援助を得るために提出した要望書には、以下のような記述が見出される。

われわれ現地生まれの人々 (our natives) の多くが統治職 (magistracies) の資格を得て、彼ら自身と邦の名誉をもって、他の公職に携わることができるようになるだろう。この植民地のいくつかのカウンティでは、現在資格を有した人材を多く欲している。そしてより重要であるが、現在われわれの法や慣習、言葉に全く無知な多数の外国人が毎年われわれのもとへ輸送されてくる中で、イングランド人によって [こうしたことが] なされなければなるまい。⁷²⁾

さらに、「現在の植民地はすぐれた学校教師の不足に悩まされ、しばしば輸送された不道徳な奉公人や隠れ法王教信者 (concealed papists) を雇わざるを得ず、彼らの悪い模範と指導によって子供たちの道徳心や正義が墮落させられている状況にある」ために、「子供たちに読み書き算術や母語の文法を指導する植民地の学校教師」を供給するためにアカデミーが必要であると述べられている。⁷³⁾

ここでの「外国人」や「隠れ法王教信者」についての言及の背景には、当時ペンシルヴァニア植民地に流入していた大量の外国人移民へのイギリス系エリートたちの不安が存在していた。アカデミーが計画された1749年前後、フィラデルフィアには年平均数千という単位の外国人移民が到着した。彼らの大半は南ドイツ出身のドイツ系移民で、奉公人として渡航する貧しい農民であった。彼らは英語を解さず、イギリスの慣習や法体系にも全く無知な「外国人」であった。1750年時点で、ドイツ系移民は植民地人口の四割以上を占め、その中にはカトリック教徒も含まれていたため、「隠れ法王教信者」という言葉が用いられたと考えられる。⁷⁴⁾ こうした植民地の状況は、フランクリンをはじめとするフィラデルフィアのエリートたちに大きな不安を与えた。すなわち、ドイツ系移民の大量流入によって自分たちが植民地においてマイノリティに転落し、コミュニティにおけるヘゲモニーを奪われてしまうのではないかという脅威を感じ始めていたのである。⁷⁵⁾

このエピソードは当時のイギリス系植民地エリートが共有していた「イギリス人意識」

⁷²⁾ Paper on the Academy, July 31, 1750, *PBF*, 4: 36.

⁷³⁾ *Ibid.*

⁷⁴⁾ ドイツ系移民については、A. G. Roeber, “‘The Origin of Whatever Is Not among Us’: The Dutch-speaking and the German-speaking Peoples of Colonial British America” in *Strangers within the Realm: Cultural Margins of the First British Empire*, eds. Bernard Bailyn and Philip D. Morgan (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1991), 220-83; Aaron Spencer Fogleman, *Hopeful Journeys: German Immigration, Settlement, and Political Culture in Colonial America, 1717-1775* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1996); Marianne Wokeck, *Trade in Strangers: The Beginnings of Mass Migration to North America* (University Park: Penn State University Press, 1999).

⁷⁵⁾ ドイツ系移民の大量流入に対するイギリス系エリートの反応については、拙稿「18世紀におけるドイツ系移民とペンシルヴァニア植民地」『クリオ』第21号(2007年)、37-53頁。

の排他的側面を映し出している。それは反外国人感情、反カトリック感情が反映されたナショナリズムであり、植民地の統治や子弟の教育は「イングランド人」によってなされなければならないとする意識である。ここには、植民地社会を特徴づけた多民族・多文化的状況に対して、イギリス的な政治制度や慣習、言語といったイギリス式生活様式を守ろうとする衝動が表出していると言えよう。

統治者として国を治め、公共に資することを期待された人材は、植民地におけるエリートであるだけでなく、帝国の一員として振る舞うことが求められた。それは長期に渡る対外戦争と大量の外国人移民という状況が生み出したものであったが、アカデミーの創設者は帝国の言語をその教育理念のなかに刻み込んだ。この帝国の言語は、寛容と多様性を讃え、非戦を大義としたクエーカーの理念とは相容れないものであった。ここでもまた、公共のヴィジョンは異なる像を描いていたのである。

おわりに

フィラデルフィア・アカデミーの創設は、植民地の商業化と都市化のなかで出現した、自発的結社という形式を通じた都市エリートによる新しいタイプの公共性を示す出来事であった。それはクエーカーの政治指導者が公的言説や政治的儀礼を通じて代表具現した公共性とは、それを組織するネットワークにおいても公共秩序のヴィジョンにおいても異なるものであった。すなわち、クエーカー的公共性が宗派的アイデンティティに立脚し、寛容、多様性、そして平和を理念的核とする公的言説や政治的儀礼を通じてペンシルヴァニアの土地に生み出されたヴァナキュラーな公共性であったのに対し、⁷⁶⁾ アカデミーが代表具現したのは、都市における商業や社交を基盤とする、帝国＝イギリス人意識を通じて本国と強い結びつきを持った世俗的でコスモポリタンな公共性であった。同時に、この公共性が内包するエリート主義や排他性は、クエーカー的公共性が奉じる寛容や多様性といった理念とは一線を画すものであった。⁷⁷⁾ さらに、この公共性は酒場や街路におけるローカルな民衆的公共性とも19世紀の民主的公共性とも異なる公共性であり、社交や結社文化を媒介として18世紀的な啓蒙的公共性を植民地に根付かせようとするものであった。このようなコスモポリタンな公共性が革命期や初期共和国期にどのような経緯を辿ったのかという問題は本稿の射程を超えているが、ブッシュマンやシールズの研究が示すように、こうした公共性の母体となった社交や洗練の文化は形を変えて19世紀中葉まで存続した。⁷⁸⁾ アメリカにおける公共性の歴史を民主的公共性の発展と衰退の単線的展開として捉えるのではなく、さまざまな時代と地域において複数の公共性が競合し、共存しながら展開していくものと理解するとき、フランクリンらの主導した公共性にも適切な位置が与えられるだろう。

⁷⁶⁾ 註7を参照のこと。

⁷⁷⁾ イギリス人意識が内包するコスモポリタニズムと排外主義の関係については、対フランス意識と反カトリシズムを中心とする研究の蓄積がある。下記の研究に挙げられている文献を参照のこと。Colin Kidd, *British Identities before Nationalism: Ethnicity and Nationhood in the Atlantic World, 1600-1800* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1999), 233-45.

⁷⁸⁾ Bushman, *The Refinement of America*; Shields, *Civil Tongues*, 308-28.